

調査研究推進委員会主催「科研申請アドバイスセミナー —日本語教育学における科研の今とこれから—」実施報告



日時：2018年5月27日(日)12:10-12:50 場所：東京外国語大学研究講義棟 115 教室

参加者：約 140 名

配布物：①当日使用した視覚資料 ②日本語教育関係者用外部資金情報(2018年度更新版)
③日本語教育学理念体系を概念的に示した「樹形図」 ④申請前のチェックポイント

1. 当日の実施内容

セミナーは、主に資料①に基づいて進め、適宜、資料②③④を用いて説明を加えた。また、「KAKEN」のウェブサイトを投影し、当該情報の活用についても紹介した。

2. 質疑応答・参加者からのコメント

以下では、参加者からの質問と委員会側からの回答、参加者からの情報提供をまとめて要約して示す。

<研究業績が少ないが新しいテーマに挑戦したい場合> 「若手研究」であれば応募しやすい。計画がしっかりしていて調書が正しく作られれば可能性は高い。また、業績のある方との共同研究に参加する方法もよい。さらに、科研以外の外部資金の場合、応募条件が厳しくない場合もある。なお、業績欄の記載のない「挑戦的研究」という区分もあるが、こちらは、新たな学術領域の探求を目指すテーマになるため、若手が単独で応募するのはやや難しい。

<科研費と「樹形図」の関係> 研究の意義を検討し、主張するための手がかりとして「樹形図」は有効。現在の日本語教育は、文法や語彙等の言語的知識のみを導入すれば完了するという状況ではない。例えば、子供たちがどう地域社会で育っていくか、親がどう社会に参加するかまで視野に入れなければならない。社会的な制度や文化的背景も含めた言語運用を考えた研究を視野に入れる必要がある。介護・看護など、専門性を追求しなければならない現場での日本語教育も実施されている。樹形図を参照することで、自分を取り組もうとしている研究、ひいては、日本語教育がいかなる社会的意義を持つかを考えることができる。

<科研応募の日本語教育学研究への影響> 次年度の予算は申請件数に応じる。採択数ではない。ゆえに、日本語教育学関係の研究推進のためには、積極的な申請が重要。採択率は年度によって違う。大型の基盤Sはほぼ応募がなく、基盤Aは採択が少なく（年度1件程度）、B、C、若手などに偏る。申請、採択の件数についてはJSPSのウェブサイトで公開されている。なお、調書作成から申請の手続きに至るまで事務的な助力が不可欠となるので、所属機関の事務スタッフと協力できる関係を築いておくことが重要である。



3. セミナー全体の印象

想定以上の参加者が集まり、関心の高さがうかがえた。参加者の8割程度が科研費申請未経験であった。セミナー後に回収したアンケートでは、「調書作成のためのポイントが分かった」「最近の研究テーマの動向、樹形図、資金情報についてよく分かった」「不採択の問題事例が参考になった」などのコメントがあり、セミナー内容が今後科研費に挑戦しようとする会員にとって有益であったと思われる。

(文責：調査研究推進委員会)